

国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業（芸術・音楽）

「弦楽器の音色を生かして四重奏を楽しもう！」

神奈川県立厚木高等学校
総括教諭 真壁宗太郎

■研究の重点内容

1. 音色に着目し鑑賞領域との関連を意識させながら音楽表現の工夫を高める指導方法
2. 主体的・探究的・協働的な学習過程による必要性の実感を伴った技能の習得
3. 情報共有場面の設定や指導手順及び指導方法

■ 題材設定の理由 「なぜ弦楽四重奏なのか？」

1. 本校は音楽経験豊富な生徒が多い。
しかし、弦楽器の経験者はごくわずか。
→弦楽器をより身近な存在として認識させたい。
クラシック音楽に対する鑑賞意識の変化。（※関連性）
2. 神奈川県学力向上進学重点校・SSH指定
→学校全体での「探究的な学び」を生かす。（※接続性）
3. 音を出すこと自体は容易だが、「よい音色」「よい表現」
のためには試行錯誤が必須。
→「一人一役」の探究的・協働的な学習過程で、音色や
表現に対するこだわりを見取りやすい。（※評価）

しかし、大きな問題が . . .

私は弦楽器がまったく演奏できません！

■個人的な疑問

教師が模範的に演奏できなければ、その楽器を用いた授業の実施は不可能なのか…？

→基礎的な奏法を習得していれば概ね可能である。

今年度の実践においても、生徒から「ここをどうすればよいですか？」のような質問は一切なかった。講師の指導を参考にし、生徒が自ら技能を発見しながら取り組み、発表につなげることができた。教師はコーディネートのみ。

■授業の大まかな流れ

	項目	目標	概要
1	事前学習	基礎的・基本的な知識や弦楽のイメージを得る ※楽器の構造、独奏曲や四重奏における各楽器の役割等	
2	専門家による指導	音色に関心をもち、奏法を身に付ける ※昭和音楽大学より講師派遣 65分×2コマ実施	
3	セクション活動	ユニゾンによる美しい音色を味わう ※パートごと 3～4名でのグループ活動	
4	四重奏	意図した表現の実現を目指す ※各パート1名ずつの四重奏での活動	
5	成果発表会	演奏会形式	



■ブレイン・ストーミング導入のねらい

学校全体での「探究活動の推進」を意識した取組として導入。
生徒はこうした話し合いによる学習を全教科で行っている。

【今回採用したブレストの3原則】

①否定しない ②思いつき歓迎 ③他者の意見から発展させる

その技能は何のために活用できるのか、生徒が必要性感じ取り、
実感を伴いながら主体的に表現を深めていく過程を重視するため。

昨年度は、ブレストを行う時間を10分程度設定し、付箋を用いる等
のグループワークを重視したが、今年度は活動過程で適宜活用でき
るようワークシートを改良した。

■ブレイン・ストーミング（昨年度）

【ブレスト 記入例】

- ・弓を弾き返すときに止めない。
- ・弓と弦を「垂直」にする意識。
- ・演奏中の呼吸は深く。
- ・弾き終わるタイミングは目で確認。
- ・お互いの音を聴き合う。
- ・主旋律が入れ替わる部分をはっきりさせる。そのために最初の1音は強く演奏する。

■ブレイン・ストーミング（今年度）

- ・ワークシートと一体化。
- ・必要に応じて活用する。

途中で活動を中断することなく、
表現を試行錯誤の流れの中で取り
組むことが可能になった。

■ブレイン・ストーミングの様子（動画）

■成果発表会の様子

■評価について

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
<p>弦楽器固有の音色、奏法、表現形態（四重奏）などに関心をもち、それらを生かして演奏する学習に主体的・協働的に取り組もうとしている。</p> <p>弦楽器の音色や奏法の特徴と表現上の効果との関わりに関心をもち、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>弦楽器固有の音色を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、その特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。</p>	<p>弦楽器固有の音色、奏法、表現形態（四重奏）などの特徴を生かした演奏をするために必要な技能を身に付け、創造的に表している。</p>	<p>弦楽器固有の音色を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、弦楽器の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取って、楽曲や演奏の解釈をしたり、それらの価値を考えたりしながら、音楽に対する理解を深めよさや美しさを創造的に味わって聴いている。</p>

■技能におけるB評価 具体的な判断材料

【四重奏の中で自らの役割を果たせているか。】

→① 他パートの音を聴き、速度変化に対応している。

→② 動作で音程・音色を調整しながら演奏している。

この2点で、「B」の明確な判断が可能である。

■昨年度 成果と課題 (ワークシートやアンケートから)

一方的に教え込まない探究型・協働型の授業の中で、「難しい・もどかしい・やりにくい」と感じたことは？

- 正解が分からない。分かっても、たどり着くまでが大変。
- なかなか意見が合わず、解決に至らないことがある。
- 進歩に時間がかかり、表現の工夫まで結びつかない。等

→ 「**技術的な問題解決の難しさ**」に関する意見が多数

■昨年度 成果と課題 (ワークシートやアンケートから)

それとは逆に、
「得られた・学習しやすい・効果的」と感じたことは？

- ・受け身にならず、欠点を補い合いながら進められた。
- ・客観的に判断し、最善策を探していく楽しさがあった。
- ・ブレストが大いに役立ち、大きな達成感が得られた。 等

→技術的な難しさはあるが、
自ら学び身に付けていく楽しさを感じていた生徒が多数

■昨年度 生徒の声をもとにした改善点

技術的な上達の進度は各生徒によって異なるため、全員一律の授業ペースで進めることは困難である。

→ **「情報共有する場面」** の設定・充実が重要！

技術的な問題に対する解決方法を見つけるための時間を適切に設定することで、様々な「解」を**生徒自身**が発見できるようにしていく必要がある。**実感を伴った**技能の習得に導いていくために、定期的な**情報共有**が欠かせない。

■今年度 成果について①

ブレイン・ストーミングをワークシートに組み込み、生徒が適宜活用しながら取り組めるように設定したことで、学習の流れがスムーズになり、**音を実際に出しながら試行錯誤する姿**が見られた。

→「主体的・探究的・協働的な学習過程による**必要性の実感を伴った技能**の習得」がしやすくなった。

■今年度 成果について②

セクション活動や四重奏だけでなく、今年度は**八重奏**や**合奏**を取り入れることで、生徒が言葉を通じたコミュニケーションだけでなく、**音**や**音楽**による**情報共有の場面を設定**することで、より深い学びにつながることもできた。

→ 指導手順及び指導方法を改善することができた。

■鑑賞との関連 及び 接続性

■弦楽四重奏の生演奏による鑑賞

- ・ ヴィヴァルディ 『四季』より「春」第1楽章
- ・ ハイドン 弦楽四重奏曲「ひばり」第1楽章
- ・ ドヴォルザーク 弦楽四重奏曲「アメリカ」第1楽章、第4楽章
- ・ アンダーソン 「プリंक・プランク・プルंक」
- ・ プロコフィエフ バレエ『ロメオとジュリエット』より
「モンタギュー家とキャピュレット家」

弦楽器の音色や奏法の特徴と表現上の効果との関わりを、弦楽四重奏を経験したことによって、より深く学ぶことができる。

■鑑賞の具体的な指導項目

ワークシートの内容（※学習の基軸となる問い）

- 楽曲やその場面に応じた「音色」を出したり「表現」をするために、演奏者はどのような「工夫」をしているか。これまでの**弦楽器の経験を生かして**、気が付いたことをすべて書き出してみよう。
- 弦楽四重奏の**生演奏に直に触れることの魅力**とは、どんなところだと思えますか。

■鑑賞 ワークシートの記入例

■弦楽器の経験を生かした視点

- ・**ボーイング**の流れが曲と一体化していて、美しかった。
- ・**アイコンタクト**で次の場面の展開を確認している。
- ・音と音が途切れないよう**腕の動き**や**押さえ方**を工夫していた。

■生演奏に直に触れることの魅力

- ・**音による空気の振動**を感じ取ることができた。
- ・録音とは**緊張感**が全然違う。リアルタイムの面白さがある。
- ・**録音では聴こえない音**が聞こえてくる。弦と弓の擦れる音。

→ 多くの生徒が、実体験の価値を実感することができた。

■今年度 成果について③

弦楽四重奏を実際に体験したことで、「聴く視点」「見る視点」に変化が見られた。

→ **演奏者としての鑑賞の視点**を獲得できた。

CD等の録音ではなく、直に生演奏に触れたことで、より微細な表現の変化について聴き取れるようになった。

→ **生演奏の魅力に気付く**ことができた。

生徒は、**表現と鑑賞を一体的に学ぶ**機会を得ることができた。

■ 今後に向けて

弦楽器は、学校に常備されていない楽器であるため、継続的に授業を実施することの難しさがあり、また、授業前のチューニングや弦の張り替え等の準備に時間を要するため、教師にとってはハードルが高く感じる面もあるが、生徒にとっては発音自体のハードルが低く、技術的な微調整をしながら学習を進めていくことができるため、授業に取り入れやすい楽器であることが分かった。

今回の2年間にわたる実践を通じて、四重奏のみならず、八重奏や合奏等の大人数で演奏することの授業における価値も感じることができた。編成等を工夫しながら、今後も実践を積み重ねていきたい。

■ 今後に向けて

弦楽器は、発音自体のハードルが低く、技術的な微調整をしながら学習を進めていくことができるため、「**思考力、判断力、表現力等を育成する**」ために、授業に取り入れやすい楽器であることが分かった。四重奏のみならず、八重奏や合奏等の大人数で演奏することが可能であるため、編成を工夫しながら「**主体的・探究的な学び**」を実現することが可能であることを実感した。

今後は、授業計画を見直し、**表現と鑑賞のさらなる一体化**（往還）を目指して研究を重ねていきたい。

ご清聴ありがとうございました。